

巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会
第10期ゼミ長 石井隆太

『慶應マーケティング論究』第10巻には、高校までに行ってきた作業から脱却し、大学で学ぶべきことに真剣に取り組み、その成果を示すために卒業論文として執筆された17本の論文が収められている。それと共に、我々第10期生が携わり、学内外で荣誉ある賞を受賞した論文が収められている。これらの論文は、いずれも、ありったけの情熱を注いで完成させた、一読の価値ある作品である。

卒業論文とは、略して卒論と称され、その名のとおり、卒業研究の成果として執筆する論文のことを指し、たいてい大学4年生が大学卒業のために取り組んでいる論文である。大学4年生とは誠におもしろい生き物で、彼／彼女らに近況を尋ねると口をそろえたように、「就職は決まったのですが、ソツロンが大変で…」と言う。ソツロンを経験したことがない者にとっては、それが如何に大変な代物で、それが如何なる意義を持つかなど、さっぱり解らない。そして、いざ自分がそれに挑戦し始めてみて、それが如何に大変な代物であるのかを知ると、ソツロンの正体が、徐々に見え始める。しかし、それが如何に大変な代物であるかを知っただけでは、いけない。ソツロンは、それが如何なる意義を持つかを理解してこそ、初めて卒論になるのである。その意義を理解しない限りにおいては、ソツロンは、やはり得体の知れないソツロンのままである。このような意味において、大学を卒業した世の多くの人々は、ソツロンを執筆したとは言いうるものの、卒論を執筆したとは言えないのかもしれない。

卒論、それは、確かに何かについて書かれた文章である。しかしながら、それは、これまで書いてきた文章——例えば、与えられたテーマについて自分の意見を述べるレポートや、自分の経験に基づいて意見や感想を書く作文、あるテーマについて調査したことを単に記述した報告書——とは、全く異なる文章である。卒論と他の文章との決定的な違いは、科学的なプロセスが含まれているか否かにある。すなわち、卒論とは、誰かに与えられたテーマについて論じた文章でも、個人的な経験談を述べた文章でも、ある事情をまとめた文章でもなく、「自ら問題を見つけ、自ら解答を与える」というプロセスを含んだ文章である。

「どうして、ソツロンなんて書かなきゃいけないんだ…」と不満を口にする大学生を時々見かけるが、大学を卒業するにあたって論文を書くことが課される理由は、単純明快である。大学で研究するべきことを研究した証を示すためである。高校と大学の違いについて、「高校での勉強は受動的だが、大学での研究は能動的である」という常套句を一度は耳にしたことがあるだろう。この常套句が示すように、高校では、与えられた問題に対して既知の解答を覚えるという活動が求められ、その活動を行った証として、定期的にテストに取り組む。一方、大学では、自ら問題を設定し、未知の解答を生み出すという活動が求められ、その活動を行った証として、卒業論文を執筆するのである。周囲の大学生に、「大学に来た目的は何か」と聞けば、「良い企業に就職するため」、「社会人になる前に目一杯遊ぶため」、「一生の友人をつくるため」などと、多様な答えが返ってくる。確かに、いずれも悪い目的であるとは思わないし、彼／彼女らは間違い

なく、大学の入学試験を見事に突破して大学側から入学を許可された人物であるため、第三者の立場からその目的を否定するつもりは毛頭ない。しかし、大学は、大企業で働くための切符を与えてくれる権威機関でもなければ、社会人になるまでのモラトリアムを楽しむためのユートピアでもなければ、同世代の同性あるいは異性との出会いの場を設けてくれる縁結びの神様でもない。彼／彼女らが如何なる目的を持ってしようと、大学は、ある目的のために存在するのである。それは、再三述べてきたように、自ら問題を設定し、自ら解答を与えるという営みを行う場を提供するため、あるいは、そうしたプロセスを学ぶ場を提供するためである。

この論文集に収められた論文には、間違いなく、オリジナルな問題意識と、オリジナルな仮説（＝解答）が含まれている。読者にとっては、それらが平凡な問題意識と、ありきたりな仮説に思えることもあるかもしれない。しかし、それは、大して重要ではない。それよりも、もっと重要なことは、科学的なプロセスを含んでいることである。如何なる問題に対して、如何なる解答を与えようとも、自ら問題を見つけ、自ら解答を与えるという一連のプロセスが含まれている限り、それは科学的な営みと呼ぶに値するであろう。与えられた問題に対して、暗記してきた解答をアウトプットするという高校までの勉強という活動とは、全く異なる研究という活動である。大学本来の目的を踏まえて、卒業を前に執筆を課されている論文。それが如何なる意義を持つか理解した上で、改めて論文を読み返せば、そのとき初めて、ソツロンは、卒論と認識されるであろう。

実際にソツロンに取り組んでみて、それが如何に大変な代物であるのかを知るだけでなく、それが如何なる意義を持つかを理解すると、この先、我々に求められている力が見えてくるように思える。すなわち、大半の文系の学生にとって、大学が最終学歴となってしまうが、そうした大学が卒論に込めた意義を考えると、学生を終えて社会に出る前に我々はどのような力を身に付けるべきであったかが、解ってくるように思える。それは、自ら問題を見つけ、自ら解答を与えるという科学的なプロセスを実行する力である。昨今、世界は大きく変化している。おそらく、ここ数十年を生きてきた中で、誰もがその変化を実感してきたはずである。そのような変化の激しい世界においては、少子高齢化、地球温暖化、情報格差など解決すべき新たな難題が次々と生じるものの、それを解決できる解答は誰にも見つけられていなければ、そもそもその難題の何が問題なのかすら誰にも見つけられていない。だからこそ、自ら問題を見つけ、自ら解答を与えるという科学的なプロセスが、重要なのである。ソツロンではなく卒論を執筆した我々は、そのプロセスを実行する力を鍛えたのに加えて、そのプロセスを確かに実行してきたと理解することもできているのであるから、卒論を通して培った力を信じて、この先の激動の時代を生き抜きたい。

こうして無事にこの論文集が日の目を見ることができたのも、多くの人々の支えがあったおかげである。第10期生を代表して、感謝の意を表したい。慶應義塾大学商学部小野晃典先生。先生の存在なくして、我々は、論文を書くことはおろか、その存在を知ることすらなかったように思える。我々は、先生のゼミに入って、学問に出会い、惹かれ、自ら研究活動に励んだ。研究を進める中で、なかなかテーマが定まらなかつたり、適切な文章で自分の主張を表現できなかつたりと、幾多もの困難にぶつかった。しかし、先生は、その度に、本当に丁寧かつ熱心なご指導をしてくださった。論文という1つの作品に対する先生の情熱に

触れて、我々は大きく成長することができたと思っている。1年間かけて真剣に取り組んできたからこそ、先生から「合格」の一言を頂けた時には、声を上げて歓喜したくなるような達成感を、誰もが感じたと思う。朝から晩まで、何度も何度も原稿を読んで頂き、誠に、ありがとうございました。先生の愛あるご指導を糧にして、この先も、より一層精進していく所存です。

慶應義塾大学商学研究科の千葉貴宏さん、菊盛真衣さん、白石秀壽さん、竹内亮介さん。将来は学者の道を志し、学問に専念する先輩方が身近にいたことは、我々にとって、大変有難い環境であった。我々は、先輩方が無我夢中で研究に打ち込む姿自体に刺激を受けることができたし、相談に行けば、直接アドバイスを頂戴することもできた。第10期生の誰もが、大学院生の先輩方のどなたかにお世話になったことであろう。ありがとうございました。第9期生の先輩方。我々が、こうしてゼミ活動を継続し、卒論を完成することができたのも、昨年、先輩方からご指導を頂けたおかげである。先輩方とゼミ活動に励むことが辛くも楽しかったため、ここまで来ることができた。また、卒論に取り組む前段階として取り組んだ三田論に対しては、有益なアドバイスを直接頂くことができた。ありがとうございました。第11期生の後輩諸君。後輩の皆には、卒論中間発表にて、あるいは、最後の校正段階にて、的確なコメントをしてもらった。また、三田論の指導をとおして、我々が学べたことも多かったように思う。ありがとうございました。

2014年3月吉日